蒼い海に願いを託して

座間味中学校　三年
宮里　瑞姫

『海の青さに　空の青
南の風に　緑葉の
芭蕉は情けに　手を招く
常夏の国　我した島　沖縄』

『芭蕉布』―。
今日も　祖父の三線が
テッポウユリの　ほのかな香りとともに
島の潮風にのせて私の耳に届く

そのたびに　その背中が
遠いあの日の世界を物語る

空には黒い影　真っ赤に染まる海
海岸を　埋め尽くすほどの軍艦
激しい爆撃音耳をつんざくほどの悲鳴
山道に身を潜め必死に逃げる人々
暗い壕の中
そこには何の色もない
あるのは
「人間が　人間でなくなる」光景だけ

カミソリで首を斬りあい
手榴弾で　体ごと吹き飛ばす
この島で起きた「集団自決」
縄で　首をしめあう近所のおばさん
口を塞がれ　息の根を止められた赤ちゃん
薬を飲まされのたうちまわる同級生

幼い祖父も
自決用の毒薬を持つしかなかった
争うことを選んだ　大人たちのせいで
「イノチ」を　消耗品のように扱う
大人たちのせいで

「死」という選択肢しかなかった

ただ待つしかない
幼い心を震せながら

あれから六十八年
見渡せば
澄んだ青空　蒼い海　緑したたる山々
耳を澄ませば

優しい風　鳥のさえずり　穏やかな波の音
その彩りに
島のサトウキビ畑が静かに応える

それは
私にとって　当たり前の色
当たり前のにおい　当たり前の光景
今日という日に　つながっているのは
決して忘れてはならない
決して背くことのできない歴史が
この島にあるから

三月
テッポウユリの季節
あの日の記憶がよみがえる
祖父は言う
このユリが　鉄砲の形をしているのは
あの戦を忘れないためなのだと
いい香りが　島をうめつくすのは
犠牲になった人々をなぐさめているのだと

神様がくれた　祖父の命
それは　私の命
ここまで　つながれたタスキを
簡単に手放すわけにはいかない
忘れるわけにはいかない
そう思えるのは
そこに　この蒼い海が広がって
いるから

今日も祖父は
海岸に座り　三線を奏でる
我した島の海に　祈りをこめて

今日も私は　静かに耳を
澄ませる
我した島に　願いを託して